本館展示「新構築」の完了報告

本年（2016 年）6 月 16 日、内容を一新した中央・北アジア展示、アイヌの文化展示を公開し、2008 年度から開始した本館展示の「新構築」、すなわち全面改修が一応の完了を見た。「一応」とあえて述べたのは、本年の 3 月 3 日に、完成を間近に控えて改修工事を進めていたアイヌの文化展示場の一画、茅葺きの伝統的家屋「チセ」の屋根部分で失火が起こり、それへの対応が必要となったためである。当初の公開予定を約 3 か月遅らせて 6 月 16 日から屋根の部分を取り除いた形で展示を公開しているが、チセ全体の茅の葺き替えを 2017 年 3 月におこなうことにしている。「新構築」全体の文字通りの完了は、したがって 2017 年 3 月末ということになる。失火そのものは、新たな展示の撮影をしていたカメラマンの不注意から、光の干渉のためライトに取り付けていたトレーシングペーパーが発火し、茅に燃え移ったのが原因であるが、資料の保全を使命とする博物館として痛恨の極みである。現在は、茅葺きの展示物の直近に消火栓を設置し、さらに監視カメラを大幅に増設するなど、事故再発の防止に万全の備えを進めている。「展示新構築」の作業の完了を控えて、博物館としての使命と責任をあらためて痛感する出来事であった。

開館以来 30 年以上、大きな改変を経ることのなかった本館展示については、2007 年に新たな展示基本構想をまとめ、2008 年度から全面改修に着手した。2009 年春に新たなアフリカ展示、西アジア展示を公開したのを皮切りに、毎年ほぼ 2 つの展示場を更新し、9 年の歳月をかけて、全体の改修を終えたことになる。

基本コンセプト

今回の展示「新構築」にあたっては、すでに 2004 年からプロジェクトチームを立ち上げ、さまざまな議論を重ねた。その結果、全体の基本コンセプトとしてはおもに四つの柱を設定した。

第 1 に、それぞれの地域の特徴・多様性を描き出しながら、同時にその地域と世界、その地域と日本のつながりがわかる展示であること。第 2 に伝統と現代といった二分法ではなく、歴史的展開の結果としての現代の状況を示す展示であること。第 3 に、今を生きる人びとの姿が浮かび上がり、同時代人としての共感をはぐくむ展示を実現すること。そして第 4 に、展示される側の人びと、つまりそれぞれの地域で暮らす人びととの共同作業によって展示を作り上げてゆくという点である。

2009 年に公開したアフリカ展示場。「働く」のコーナーでは、一人一人の個人に焦点をあて、動画やメッセージ文のなかで、それぞれ自分の「仕事」についての思いを語ってもらった。同時代人としての共感をはぐくむ展示として、この手法は、展示開幕後の国際シンポジウムでも、新しい民族学展示の方向性を提示するものと評価された。

それぞれの地域の人びととの共同作業という点に関しては、たとえば私自身が直接担当したアフリカ展示に関しては、セネガル、マリ、ナイジェリア、カメルーン、タンザニア、ザンビア、南アフリカ、マダガスカルという、アフリカ 8 カ国の博物館や大学の研究者に展示アドヴァイザーになってもらい、3 年をかけてアフリカ各地をともにまわって現地の文化遺産の状況を共同調査するとともに、日本で定期的に会合を重ねて展示を作り上げた。こうした文化の担い手との共同作業による展示の構築という方針は、去る 6 月に完成したアイヌの文化の展示に至るまで、一貫して継承されている。

新たな展示の高度情報化に向けて

このように進行してきた本館展示の「新構築」に伴い、膨大なバックデータが集積され、現在もまだ集積され続けているが、展示では、そのごく一部を提示できるに過ぎない。民博では、今後数年のうちに、ビデオテークの更新、次世代展示電子ガイドの導入を予定している。それに合わせ、最新の研究成果を展示に注入できるよう、モノの展示をつねに更新するとともに、その展示を糸口として、観覧者や研究者の興味と関心に応じて人類の社会と文化に関する研究情報を取り出し、さらなる探求につなげることを可能にする展示情報システムを創出することを計画している。それは、すなわち、モノの展示と情報メディアを高次元で統合した展示を実現しようとするものである。

2016 年 6 月 16 日に公開したアイヌの文化の展示場。館内の展示プロジェクトチームメンバーのほか、貝澤和明、北原次郎太、瀧口夕美、津田命子、床州生、野本正博、山崎幸治の諸氏に共同研究員に就任していただき、協働のもとに新たな展示を作り上げた。

「新構築」を終えた展示の高度情報化をはかり、民博創設当時から構想されていた、文字通りの「博情報館」を実現すること。それが、国の定める本年度以降 6 年間にわたる第 3 期中期目標・中期計画期間における民博の目指すところである。

文　吉田憲司

国立民族学博物館文化資源研究センター教授・副館長。博物館人類学専攻。1978 年以来、アフリカを対象にフィールドワークを続ける。2008 年の本館展示新構築の開始以来、文化資源研究センター長（2008 年度）、展示専門部会長（2009–2014 年度）として、展示の改修の取りまとめの役を務めてきた。